様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：２４５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2017
課題番号：２５３７０３６６

研究課題名（和文）ロシア宗教ルネサンスの思想と世界戦争

研究課題名（英文）Philosophy of the Russian Religious Renaissance and World war

研究代表者
北見　諭（KITAMI, Satoshi）

神戸市外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：００２９８１１８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、前半には前回の科研費研究を継承しつつ、20世紀前半のロシア哲学の中心人物たちの哲学思想の全体像を解明する作業を行い、後半には第一次世界大戦期における彼らの「世界戦争の思想」を、彼らの哲学思想と関連付けながら解明する作業を行った。
　前者に関しては、今回の研究では、セミョーン・フランクの哲学をベルクソンとフッサールのとの関連で、またセルゲイ・ブルガーコフの哲学をマルクス主義との関連で検討し、それぞれ論文を執筆した。また後者に関しては、彼らを含めたロシア哲学者たちの第一次大戦期の思想を検討し、とりわけ前回の科研費研究で扱ったベルジャーエフの世界戦争論を中心に、現在論文の執筆を行っている。

研究成果の概要（英文）：In the previous Kakenhi research we had studied several Russian philosophers of the period of “Silver age”. In this time, continuing this research, we had studied at first the philosophy of Semen Frank in relation to the philosophy of Husserl and Bergson, and next the philosophy of Sergei Bulgakov in relation to the philosophy of Marx and Russian sophiology. And after these studies, we undertook research on the “philosophy of the world war” of Russian philosophers of the period of “Silver age”, especially focusing on the thought of Nikolai Berdyaev, whose philosophical thought we had already studied in the previous Kakenhi research. On the philosophical thought of Frank and Bulgakov we had already published articles. and on the philosophy of the world war” we publish two articles.

研究分野：ロシア思想史

キーワード：ロシア哲学　世界戦争　セミョーン・フランク　セルゲイ・ブルガーコフ　ニコライ・ベルジャーエフ　生の哲学　プラトニズム

１．研究開始当初の背景

「ロシア宗教哲学ルネサンス」と呼ばれる20 世紀初頭のロシアの哲学思想はロシア思想史におけるその重要性が指摘されていながら、いまだその全体像が解明されているとはいえない状況にある。個々の哲学者のそれぞれの思想に関する個別的な研究は、ソビエト崩壊後に始まったロシアでの本格的な研究がその成果を次第に現し始めているが、一見すると多様な方向に分散しているように見えるこの時代の重要な哲学者たちの思想を統一的に捉えることを可能にするような研究は世界的にもまだほとんど存在しないのが現状である。

本研究は 20 世紀ロシア哲学研究のそうした現状を背景に、前回と今回、10 年にわたる二度の科研費研究で、この時代の思想の深層のレベルに潜在している思想的な文脈を明るみに引き出し、20 世紀ロシア哲学の通史の記述を可能にするための前提を作り出すことを目的として行われた。

２．研究の目的

（1）今回の科研費研究の目的は、第一には、前回の科研費研究でヴャチェスラフ・イワーノフ、ロースキー、ベルジャーエフという 20 世紀初頭の代表的な思想家三人の思想の全体像を明らかにした研究を継承し、新たにフランクとブルガーコフの思想の全体像に同様の検討を加えることで、これらの哲学者たちの思想が共有している 20 世紀ロシア哲学の共通の基盤を明らかにすることにある。

（2）今回の研究の第二の目的は、前回と今回の二回の科研費研究で扱った五人の哲学者たちを中心に、ロシアの哲学者たちの第一次世界大戦期の思想を取り上げ、彼らが 1914 年に始まる「世界戦争」をどのように理解し、それをどのように意味づけているのかを明らかにすることであった。今回の研究ではとりわけベルジャーエフの戦争論を中心的に検討し、それとの関係で他の思想家たちの戦争論の意味も明らかにするよう試みた。

３．研究の方法

（1）上記の「研究の目的」（1）の項目で述べたフランクとブルガーコフの思想の全体像の解明に関しては、前回行った三人の思想家の研究と同様に、彼らの思想に対する生の哲学の影響に注目し、それを手掛かりにすることで、彼らの思想の核となる問題を引き出すように試みた。フランクに関しては、彼の存在論におけるベルクソンとフッサールの思想、ブルガーコフに関しては、彼の経済哲学におけるマルクスとロシアの神学的な理論であるソフィア論が持つ意味を解明しつつ、彼らの哲学思想の基盤にも、他の思想家たちにおけるのと同様の志向が働いていることを明らかにするように努めた。

（2）上記の「研究の目的」（2）の項目で述べたロシア哲学者たちの「世界戦争」の思想に関しては、これまでに蓄積してきた彼らの哲学思想に関する理解を背景に、それとの関連で彼らの戦争論を解明するように努めた。この時代のロシアの思想家たちは、生の哲学の強い影響を受けていながら、同時にそれに批判的でもあり、それとは対立するはずのプラトニズムをそこに導入することでそれを修正しようとするという特徴的な共通性を持っている。彼らの戦争論にも、生の哲学とプラトニズムという二つの異質な傾向が矛盾的に結びついた状態で含まれており、それが彼らの世界戦争論の方向性を規定していることを、彼らの戦争論の分析を通して明らかにするように努めた。

４．研究成果

（1）上記の「研究の目的」（1）に関連する個別の思想家の研究に関して言えば、まずフランクに関しては、彼がフッサールの現象学の方法に基づいて認識論的な議論を進めていること、しかしフッサールが志向的に内在するものとして明らかにしたイデア的なものに関して、それを意識の側から志向的に内在するものとして捉えるだけではなく、それがどこから意識に内在してくるのかという問いを発することで、フッサールが排除しようとした意識の外部に目を向け、認識論的な議論から存在論的な議論に移行していることを明らかにした。フランクは意識に内在する現象学的な立場をとりながら、それによって得られる現象学的な問題構成を意識の外部へと反転させることで、ロシアの同時代の思想家たちが直接的に捉えようとしていた意識の外部の実在を現象学に即したやり方で捉えようとするのである。そしてフランクはさらに、その意識の外部の実在を、意識に内在する可能性があるすべてのもの、つまり現在、過去、未来にわたる世界のありとあらゆる可能的な現われの全体、それらを潜在的に含んだ無限の集合体と見なしている。そしてそのような集合体が時間的に圧縮される形で意識に内在してくるとき、そこから同一的なものが析出されてフッサールのいうイデア的なものとなり、逆に同じものが時間的に引き延ばされた状態で内在してくるとき、時間的な生成変化の流れとして現われると考えている。同時代のロシアの思想家たちは実在を、生の哲学的な絶え間なき生成であるのと同時に、プラトニズム的な永遠に不動のイデア的な存在でもあるとする矛盾した実在概念を持っているが、上述のような世界の可能的な現われの集合体というフランクの実在概念も、一方では意識に対してイデアとして現れ、他方では生成の流れとなって現れるものという性格を持っており、実在を生成的であると同時にイデア的でもあると考える同時代のロシアの哲学者たちと同じような実在概念を形成しようとする志向がある

ことが伺われる。このことについては論文「全一体におけるイデア的なものと時間的なもの ── セミョーン・フランクの『知識の対象』におけるフッサールとベルクソン」において論じた。

（2）フランクについてはさらに、彼の思想がフッサールの現象学を起点としつつ、そこから離れて存在を問題にするようになるにつれてベルクソンの哲学に接近し、現われの無限の集合体としての実在という現象学から得た自己の実在概念を、ベルクソンにおける持続としての実在、より具体的には記憶と重ね合わせていることも明らかにした。フランクは、フッサールが意識に志向的に内在するものと考えていたイデア的なものを、意識の外部にあらかじめ存在している世界の可能的な現われの集合が時間的に圧縮されることで析出される同一的なものと見なしているが、フッサールのいうイデア的なものは、このように解釈されると、たしかにベルクソンにおける記憶の収縮のイメージと重なり合ってくる。フランクはフッサールとベルクソンが交差するそのような点を捉え、それをもとにして、フッサール的なイデア、さらにはフッサールを介してプラトン的なイデアを、ベルクソン的な持続と結合しようとしているのである。そうすることで実在を、一方では時間的で創造的な生成変化の流れであると見なしつつ、同時に永遠不変のイデア的な存在でもあると見なすことが可能になるのである。しかしこのような重ね合わせはあるすり替えによって成り立っている。フランクはフッサールからベルクソンに移行するとき、フッサールの超越論的主観性が時間の流れから切り離された非現実的な抽象になっていることを批判し、それを万物の時間的な生成変化の流れの中に置き入れようとする。しかし、そのようにして時間の流れの中に解消した超越論的主観性を、彼は実在の圧縮によるイデア的なものの析出を考える際には暗黙の内に復活させているのである。ベルクソン的に考える限り、実在（記憶）は主体の身体のプラグマティックな志向に沿うように収縮するため、それによって析出される同一的（イデア的）なものは特定の主体の特定の時点におけるプラグマティックな本質にしかならない。フランクはそれを避けようとするかのように、ベルクソン的なプラグマティックな身体を、時間的空間的な特定性を持たないフッサール的な超越論主観性に暗黙の内にすり替えている。彼は一方では実在を生の哲学的な万物の生成変化の流れと見なすために超越論的主観性を解体しておきながら、他方ではイデア的なものがプラグマティックな性格を帯びることを回避するために、解体したはずの超越論的主観性を復活させている。フッサールとベルクソンの重ね合わせはこのようなすり替えによって成り立っているのである。この問題については、論文「持続の知性化とアンチ・プラグマティズム：セミョーン・フランクのベルクソン解釈をめぐって」において論じた。

（3）個別の思想家については、フランクとともにもう一人、セルゲイ・ブルガーコフの経済哲学に関する研究を行った。この時代のロシアの思想家たちの多くは 1910 年前後にロシアで流行したベルクソンやプラグマティズムの影響下に自己の独立した哲学を確立していくが、ブルガーコフの場合にはそれらの現代思想の影響が表面的にはそれほど現われていないように見える。しかし、彼の場合もその思想の変化を詳細に分析すれば、1910 年前後に生の哲学的な方向での変化が生じていることが明らかになる。その変化はマルクスに関する解釈の変化となって現われる。彼は最初期にはマルクス主義の科学的な性格を評価していたが、次の段階ではそれを観念論によって修正しようとする傾向を示すことになる。しかし 1913 年の『経済哲学』になると、彼はそれらのいずれとも違ったやり方でマルクスの哲学を解釈するようになる。彼はそれを、西欧の伝統的な意識の哲学を乗り越えようとする反主知主義的な哲学として、一種の生の哲学のとして評価するようになるのである。ブルガーコフによれば、マルクス主義のうちには古典派経済学を介して主知主義的な科学主義が混入しているが、それはマルクスの哲学にとっては異物であり、彼はそうした異質な要素を取り除くことでマルクス主義を生の哲学的な方向へと純化しようとする。そしてさらに、同時代のロシアの哲学者たちが生の哲学をプラトニズムによって修正しようとしたのと同じように、ブルガーコフは生の哲学へと純化したマルクス主義を、ソフィア論という神学理論でプラトニズム的な方向に修正しようとする試みを行う。マルクス主義を生の哲学的に理解すると、経済的下部構造、つまり生産諸力は世界を生成させる盲目的な力、いわばディオニュソス的な力としてイメージされることになるが、そのように解釈すると、歴史はマルクスが考えているように合目的的なプロセスではなくなり、どこへ向かって行くのかわからない盲目的なプロセスにならざるを得ない。ブルガーコフはそれをソフィア論によってキリスト教的に、あるいはプラトニズム的に修正しようとするのである。こうした問題については、論文「ブルガーコフの『経済哲学』におけるマルクス主義とソフィア論」で論じた。

（4）上記の「研究の目的」（2）で述べたロシアの哲学者たちの「世界戦争」論に関しては、以前ヴャチェスラフ・イワーノフの戦争

論について論じたことがあるため、今回はベルジャーエフの戦争論を中心に取り上げることにした。今回とりわけベルジャーエフに注目したのは、以前研究対象にしたイワーノフを含め、ブルガーコフ、フランク、エヴゲーニー・トルベツコイなど、この時代のロシアの宗教思想の中心人物たちと比べ、ベルジャーエフだけが他の思想家たちとは明らかに異質な戦争論を展開しているように見えるからである。他の思想家たちがナショナリズムや帝国主義を批判しつつ、あらゆるネーションが対等に関係しあい、相互に補完しあうような調和的な世界共同体を構想し、そうした共同体を本来的な世界構造と見なすのに対して、ベルジャーエフはそうした調和的な永遠の世界秩序という他の思想家たちの思想を批判し、時にナショナリズムや帝国主義に肯定的な態度を取り、さらには、ロシアは他の諸ネーションを救済する使命を帯びた選ばれたネーションであるというメシアニズムの思想を展開してもいる。他の思想家たちは、ドイツのナショナリズムや軍国主義を永遠の世界秩序を乱すものとして批判し、この戦争がそうしたドイツの悪しき志向を取り去ることで、これまで潜在化してきた本来的な世界構造を顕在化させるというイメージを持っているのに対して、ベルジャーエフはあくまでもロシアを中心化し、今回の世界戦争は世界がロシアを中心として完成へ向かう段階に移行する契機となる出来だと主張する。われわれは世界戦争に関するこうした態度の違いの背景には、彼らの哲学思想の差異があると考え、これまで明らかにしてきた彼らの哲学思想の理解に基づいて、彼らの戦争論の差異を意味づけるように努めた。この時代のロシアの哲学者たちは生の哲学の圧倒的な影響を受けつつ、同時にそれと対立するプラトニズムによってそれを修正しようとする共通の傾向を持っているが、それを踏まえて簡潔に言えば、ベルジャーエフの世界戦争論が生の哲学的に世界戦争を解釈し、ネーションや戦争や世界史の問題を生成の相において考えようとしているのに対して、他の思想家たちがプラトニズム的に世界戦争を解釈し、あるべき世界構造を永遠に不変のイデア的なものの相において考えようとしているという対比でまとめることができる。この問題については近いうちに論文にして発表する予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　３件）

① 北見論、持続の知性化とアンチ・プラグマティズム：セミョーン・フランクのベルクソン解釈をめぐって、『神戸外大論叢』、査読有、第 65 巻　第 2 号、2015、25-49
② 北見論、全一体におけるイデア的なものと時間的なもの：セミョーン・フランクの『知識の対象』におけるフッサールとベルクソン、『スラヴ研究』、査読有、62 号、2015、137-171
③ 北見論、セルゲイ・ブルガーコフの経済哲学におけるマルクス主義とソフィア論、『スラヴ研究』、査読有、64 号、2017、75-107

〔学会発表〕（計 3 件）

① 北見論、全一性の現出と時間：セミョーン・フランクの『知識の対象』におけるフッサール、ベルクソン、プラトン、「近代ロシア・プラトニズムの総合的研究」研究会、2014 年 3 月 6 日、北海道大学スラヴ研究センター
② 北見論、持続の知性化とアンチ・プラグマティズム：セミョーン・フランクのベルクソン解釈をめぐって、「近代ロシア・プラトニズムの総合的研究」研究会 2015 年 3 月 6 日、北海道大学スラヴ・ユーラシア研究センター
③ 北見論、セルゲイ・ブルガーコフの経済哲学におけるマルクス主義、ソフィア論、否定神学、「近現代ロシア文化におけるプラトンおよび古代ギリシア表象の諸問題」研究会（早稲田大学特定課題研究助成費 2015B-055）　2016 年 3 月 3 日、早稲田大学

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし

６．研究組織

(1)研究代表者
北見諭（KITAMI, Satoshi）
神戸市外国語大学・外国語学部・教授
研究者番号：00298118

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：

(4)研究協力者
(　　)